911.3
八
上

俳諧十論　附序

東華坊　述

あさまし武江の芭蕉庵にて第一話祥とて孫を
あつめて吾翁のをりふしとありつ我家の風雅と
ひろくむかし文を論語の述而にあつかひねは維上
の向疾にあそふて世に十論とあまねく行はれ為
は例のゆかし紙にす今や世間の俳諧とえるに
其のまゝは本の葉もるゝことき人のちりうせて
斯様にて一つに我家の俳諧を云て好み気品は
まうてく例のおふく例のはかりしく夫子の本意の

世俗にあそびくらす人のかたてまにはいかいをたのしむものゝ
おこなひとよぶものなし然れども人とまじはりしなと
かたりて人をわらはしむれども俳を伝んとむは笑あれど
口舌の為とおそろしより俳諧のはなはだなるを
けなす世論ともなく万言の論めかしに翁子庵の遺稿
いちてあしきるや流れを世の為に三十余年して甘住
あり黒滅ありとや此論もや私なからんふかく
之非の實意とかすかに我門の風雅と世に伝ふ
へりぬも例に俳諧の虚実あらて例に文章の當否
ある謙に習ふ一に謙に悟る事し

第一 俳諧伝

抑も俳諧の伝といふをたづぬるに史記に滑稽の
名ありて齊楚の比より秦漢の間までに七八人此
言行をあらはし太史公は天道の賛詞より或は笑言
をもて大道にかなふ事をしめし或は談笑をもて諷諫とも
滑稽とは酒稽の喩なるよし挑氏は俳諧のことばといふ
畢竟は虚実の自在より言語にあらはるゝのいひなん
されは俳諧の名なるやしかれば虚実の翻案あるべしもとより
三皇五帝より禹湯文武に伝はりて其名は司馬遷

ら史記にいはくかりぬとあるへし諸に大抵なるとさら
て儒仲老荘のむねしらる寓言を宗とすてはくいふ
へく寓言を寓となしてたとへハ孔子に荘周ありて
仁義をもとさ釈氏は達磨ありて仕論とやかる
いつれも俳諧の様変ありけらん俳諧もし儒仲と
やうけく今らて詩哥の媒とはふーしらいや物ぞおる
まし天の浮橋よしけんと伴へく伊弉諾伊弉冊の鶺鴒の
喩より天照御神らうけ給ふ猿くへ虚実の間に
みとはゆめむとて猿田彦いそ姿おかしく天鈿女ら
まけさくし舞に風雅の俳優とよれしきのんとらり

八雲のいろくに雑体はの哥いでゝあるとあつて浅香山
の詞もて虚をあつかふ一万葉にもしてはいふなかる
誹諧(ハイカイ)の名もたゞ今集に見たゞしゆつりてはなれより和哥の
一体ともなりぬけるを俳諧(ハイカイ)と誹諧(ヒカイ)と音訓の論
ありて八雲御抄(ミ)にも二名(メイ)とあきられ二条家の哥仙
達も此風体をふかるならむねりかりして法式より新作の
差別(口伝)あれハ芭蕉家の書ははる人倫の俳諧を
用ひし白馬に家訓の一條しもあそうにて文明の比
あらん山崎の宗鑑法師をそれより誹(ヒ)諧の名あるより
守武望一もみなれとそのひて百韻とゆくゆく子ら向をはならぬ

貞徳は貞室に宗匠の名ありて世に誹諧の三家を
伝へられしに貞室はやく吉野山の花と詠し
隅田川のうたに吟して一句は和哥の深情にかよへる人も
今の風雅の根ざしとやいふべき其のち難波の宗因は
武城に檀林の額をうちて誹諧の涅覚は破られしを
耳に言語のおかしきとゆく眼に字法のさびしさを
あらはれしよりここにこそはなしといふしさに附は
こと師なし其師なくしてそれの中にもあらぬ実作に
今の此の誹諧といふハ今様の人の好にしたがひて新
よらく達者なる人も一二点の俗耳にかなひて誹諧の

心さとかまはるゝ人あれとも誹諧の心と絶りて師なしおのれらや
いふ俳諧は是まさへ唐虞の先にあらはれて是なる
旅川楚の後にあらはれたる風は和漢の一躰となりぬ
況や是らまさに法と成さてそれ世情とあつらふ数となりぬ
滑稽の心を吾為に得りて萱葦相の様と作りけ
て俳諧の禅をはなれぬよりも法然上人の為に
あはく善悪の法とはなれより古池の
蛙に自己の眼をひらきて風雅の正しきを見付けらん
実を天よりうけたまて自悟とも自證ともいふべし
せよしかし誹諧はいさゝかにして俳諧はよし　芭蕉庵

とえ祖として尊し

傳曰此一段は俳諧の根ざしを示して儒佛老の三ツより千差万別の岐あれども帰する所は虚実の二つにて今や俳諧の一道とても虚実をあつかふ仲立とする蝶の二字にて十論を作りて世法に時宜の二字あることを信ずべし。されば俳諧と(にかい)誹諧の字論は古今集とも數尾及びて誹諧してよむべしとて此類とさし。杜実の法と云へやう未だ路及びて俳諧(ハイカイ)と訓じて一代門に向ふ論を今うけて白馬の四十二法にならそれ

と云の口傳とするや猶らしくなお哉は。伊賀の素性して
これより桃地の黨あらはし荘年に仕官ともなりき
洛の季吟に俳諧をするがゆへ埋木は書なりて
朱点を加へる抱二冊ありて終に寛文の中比
あらは建る新式を書せよりて終へられくさ
頭書に朱点を加ふ或は百人一首の秘抄あり
或は古今の序傳ありとも云はれするに七人
の師あることときこえて学のほどをふるまひなく
終として終へもとして云ふ事なしかくて天和の秘抄は
武江の深川に隠遁して吾が仏や鍾が石の音

とある連歌の一句に自己の眼をひらきてそれより俳諧
の一体をひらかれけるにより其いはれを俳諧の列仙と
論をへ史記の滑稽伝よりその名を借りて古今集の名
にならひむへきと今は俳諧と誹諧とにまかふへく
新旧の名をもちて天宗の一つを建立したれ
祖にかへる事の八九をひらくしかよ和漢の一二を
あらそひくるに文章自在の論といふへしされ
中古の俳諧師をおほくたえなのさまを知し其世より
貞室を称名とし一句は今の世に讃せへし
これ〳〵とはかり花のよしの山

其のあれ誹諧の躰ならひに知る
誹や廿二句の深意をかそへて今の俳諧の根さしとする
言に・風雅の私なかりしも家に新旧の差なきと
信すへし　蓋いにしへの廿題の本作をしらすは鳥柱の
才子得とえらふへし

第二　俳諧道

おもふに俳諧のはしめいはゆる才一に虚実の自在より世間
の理屈をよくききわけて・風雅の道理にあそふといふ世
諺よ俳諧の實語ある一すちへにまかせてはなかなからぬ狂言

誹諧の儆はすなはち虚実の間にいとあそふものなり其説
の誤を宗とすべしやうやく虚実をしらざるおほふ
不知言語なるんとやせまいふ俳諧は花鳥の風ありと
はじめ黄色とするねく人のいひ世はなく花鳥の為
荘子やくの天遊とえとして吾人の仁義と縁をわれ
世情の理非をおしかけて虚実のさしわけあるも
いきて志るに俳諧は理非をあつかはず今日の営為を
あつかはぬもの也を虚実の変化によりてあつかふ法と世情
の和説はいまだ実と一字録のおもむきて附頁
此一法をさてるやまさしく俳諧の本ともいふ儒仏老荘

の間をはなれず虚実は中庸の法ありといへどもおほよそ
儒仏の大にして虚実の意をむねに宗とせざるを俳諧
はそれは仲人とするなし法にていへば三條あり世情の
人和その倫の常法をしておしなべて俳諧の名とする
はいしまた風雅の姓とすべし人よくいひときつけて
男女千里童の四維孩をとかずにして摩一枚のちひをとなれ
まで口に八珠の草香をはじめねども一瓢の飲のたのしみ
をかくまでんに世情の変をさして其言に耳をあてざる
もの俳諧自在の人とすべしするに新古の俳諧も
宗匠とよばひ守武とするなかれ俳諧の詞はひとつなり

されバ俳諧の心を師へなんなしけれバ宗養が俳諧
は古人なしといふことをひそかに門人にかたつて宗訓
の秘文となしおきりける秘事の滑稽を論じ
むかしの俳諧よりこのかたまで今の俳諧になりぬ
ならといふも実に知らん代々の撰集にも風雅のいはゆ
ならずして俳諧の詞の比興をもつぱらとして俳諧の心
の風雅なると弁へざるや。俳諧の詩は杜陵
ある事に似たりありて物の情をよくはなれふう
それ狂言を俳諧とおもひて例は庵室の自在より
例のおかしく例のあられぬ風躰を。以来遂滅の事あらん

此ごろの詩人哥人連歌風景をかざり言葉をあやに
哥をはくりはをはなれるのくいつれも上手のなれあらん
名人の場をもうるに遠く人まうくは名人とも上手との
はらひにちりを。十知の其にはくさき名人は一字の信に
あらふ信を万物の為にまつる人は天地もこれを為に
変化をいれて雨とおくきは風とおくき鬼神もこれを為
に涙をこぼしてむまそさて月も傍より况や俳諧
の卓犖なる信ある人の虚誕に處する人や実に
儒仏の内証とはくれし名人もこれを信にみてをおくものゝ
上手こそ其法をひろむる人の道なり

昨日なり才子しあらの冥府なりん儒家に要を明さひ
あるも釈氏は佛菩薩の名をかりてあるもるに頓断の
沈なりとちへしおもらそれ古詩といひ大哥といひ
それから発句をなくばせられんと代ちふるさとしておもられ
うまのみやしさふかくしとや詩哥らいふに箴戒かぐ
むかしでもとのくるとうやむこそる道遥のこと侍ち
おくれるとを溪魏の沈より詩よりあそびて淵明やく
風雅のいも実をてらしへ万葉ら今の口振にひとしく
あるる艸木の深へとあそびしあるそ男女の情を演る
まことに能かなくらして言語にあるはぶかきあさきと

虚をまじへて実に自在なりやかくのごとくなるの元祖
とあがめ奉りし誹諧むかしよりの十分の上にあると云しは実に
長頭丸行下に十指の名をとりたまへ天下にこの子の徒あれ
ともいはむれて俳諧とせられたることの佳なりやを
惟然が功と俳諧されて武江のつよ俗にせまらし
・佛頂和尚の禅室にまじはりて杉子一旋の葉に呼語
とならて俳諧のたぐひと口伝されより世の向の花瓜
とうなるる風雅のためにあらそひて翁の所を
また御のうへとせくし湘南の幻住庵に山居の名
とかくして杜律の五言を枕とし山家集とれつるまた

て貪閑をすてに背よいつはる玉帛の礼とし賤とおもふを
淡薄やうすきをよろこぶ衣食の奢をしらんとならし
やむて遠きを椎葉の糧とし近きは古むの酒を
きれさえかくちロのえれとおもひとしいやすあしらはを
生涯の計とし俳文のうきるも主へあれは例の(さし)
く例のたかうしく俳諧をんのあちいちるとそるむへし
されもやけるとの功を論をは儒仏老荘の虚実とあつかひ能哥
連歌の理とおもてあて国よつきむるにあれは京にあそふ
子あるところき俳諧は天下の一助(ことば)とて了ふへしまされし
俳諧の人を宮(みやこ)所の其のむれそいふれ田舎の秋の歴

にかはりて工家市商店のちまたにはよろしとかくをも酒肆
娼房のあそびよくおうかに世界は浅猫の人もあそびし
向上の一路をあやうき木とはひく人を損するもしけれ
ちらんらんと益あるもしけるてちらんら気に此へは五兵衛に
それまく人を論するとて俳諧をきねのすゝめしをと
そういけ諧を我宗家の貴賤金あるもしおよそその人此付
過さへきとや今そこの計意と論するにあらずはおほよ
おほくよのつねにあそびやすくかんに老らく世の人へよりし
へきをきく此俳諧のことあれはこそ虚実の媒として
世情の人和をもつて也評や此たの浅俎ちらちらめ

くん人の学ふへくしてくん人のおきるへかれハ是れなるの
金言と世に傳へて物の始と終とをしらしむ中にも人間の
あらひあらしてはしめしけるの事地あらはすと あるへし
傳曰今は俳諧の一言たる大極の二氣の動きて物
に歴然の事あらはる或は神農の婦女とはなり
或は黄帝の姿を作へて其名を史記に作らしから
ねさるを中古の俳諧ないかにてたるを論するへく
今の俳諧にけるとわくるとこれらを例の過當
あらし言を俳諧の頓挫としるへしけれハ台馬氏
諷文とひとへてちからる氏大言とひそられ耳語されい

それより律に体段の玄論あるゆゑに條の法ありて
儒ハ仲尼に実を説きれ佛ハ釈迦に虚をときたるも
ありて老荘の是非をわけ侍らんこそと中庸
のにありて実を俳諧の大宗師と学へしけれ
の文章に六義の中にも名とさらにて是と作るへし
まん風を訊りてこれ物とよみて雅を学して 詞論
とやうくけるは詩経の大むねなる筆意ハ虚実
の換んあるよし今又白馬の貞享式にあるへし
次に投子一碗の茶に俳諧のまといとは傍とよる處に
世の倍ひを律をは直に一を天地の一虚によれそるく

其六二ハ人間の實よりてするもの其にハ大ならずして
虚實の壺をもてわれハ或ハ人倫の實をよそほし
恩愛の閨よりてとまた或ハ人倫の虚よおちて
慳貪の火に家をやくもありて畢竟ハみなはかなき
とのたまひて皆はそ虚實の二句月あるとや
いさや我家の俳諧もそれ例よ二句同のちかしかれバ
言語の外をはなれむとて松風蘿月の旅を
たのしみてかれと両上の消合ともふみしは皆や
投子一碗の茶に俳諧をさとし手ませあるぞしらずして
年の非をもりても茶に置ぬ味わきるよし

稽山ノ章在テ投子ノ會下ニ爲ル柴頭ト投子一
日與ニ柴頭ト喫ス茶ヲ乃曰森羅万象總ニ在リ這裡許ニ
柴頭潑却シテ茶ヲ曰森羅万象在リ什ノ處ニ
投子曰可シ惜ム一椀ノ茶
是ハ投子の茶を點して茶碗の中に世界あり
とへば潑かへしく拈きたしくて我も新しき前句
あらは柴頭といふさへか味はあれ没滋味の心よ味
をさとして茶と打あけていふことよりあたらしく例よ
我家の元極ちるをおよびし二句同の理にまよる
世よいふ不理不おもゐのいたりなして實ハ此昨の抓合

なんするに授けたまへと失ひきしあるは第一巻
於けるよしとて誹諧の句のみにはあらずそれ故則
に眼中の力をぬくうて声らしきは話の耳にわつかき
流れ世也に俳諧とありて何事の言語にあたらぬ
一言や又そこに俳諧をかへしたれど理屈のはなし
ありて理屈に理屈とかされなば国をもおもはし
勇をも失ひてむ実とはその一大事にして修業の
口伝なるべきや此世の世におとなれば虚実
の間の事は節をはなれて誹階幸子の喩によるを
十年の非にも皮肉をとぢて十年の活にも耳同

とあれどもさて致知格物の條目よりなにはじめて
天下の一助となりちむ君たるや此論の注さるる所
えは一家の信とあらずして法は是ねのさらしとかる
お旧よおそれく学をふかく明らかにたちおそれむ
へきなるそとく此俳諧の一道なるん

第三俳諧ノ徳

抑も俳諧の徳といふは名理と理屈と此二つありて人情
を捨て天理にあるがふといふも法て俳諧の情なるや文
にもかりそ武にもありも活せるは仁勇の三つにして智を

此性とある所にしたがふも仁勇の性なるとしるべし　されど
此智にも二ありて世智は仁勇とかゝはらず自智は
仁勇と共に行はるゝなり　たとへば張良が女児の形あるに似たれど
其を我家の司馬遷よりも俳諧の仁と説笑の親睦と
いひ俳諧の勇と文章の頓挫といふ智をいさ俳諧の
機変に叶へるものなれば此俳諧の風雅を身に
詩は連歌よりかく詩は連歌に勝されば氷の如く
もまた俳諧のさまをうつさしむとされば
のことばにして意を達するの一行とも我道の風骨とも
世にいはゞ俳諧の一流をたてたるなり　詩は連歌のみならず

とされば此性とは性の基としるべし　此法
をひろむる物は是を理を筆とのみひろくしてたれと
地にて文章なれば文章の上に言語をかりて法は
言語の書とされとやはれば是を理をとらば此
全く善にして理を知るに全く悪なりといふべからずや
是理なる善と悪ありて理を知ればいへば悪なる物也
よりて善悪は善悪のことあるとやとされ十分の是理
あれども君父をあしきはあるぞかれむは君父を疑ふ
さるも是理なれば理を知るまくらもその理なるべし
とされば是れと申すとて君父といふ申す父をさとしむるや

なき理の悪なる物なれバ也実に常理の世なる時ハおのづから
理屈としられるとなん言ふかき水と氷とのごとし此理
世間の議論も理の剛きも非の一倍といはるゝとて虚
言語の虚実となるへし是れらのみなりとて人とあらさ
そとなれバ浅ぐなる調をやつけて面白ふ人といさふ
つむなきかりしといふ人間の霊なされいる理の大
にして理屈のあるへきに人ありんとする此理や世情とやつけ
て徳の酒色とおもふべきなりとなへたる理と理屈の
ちがひを許状に理屈にならされバ奉りし頭人もいと
浅くて不くる紕繆なる理によらあられバ大家

おこり起るおのづからはじまれる言語の便乗より。なるべき文章
あるハいひやぶして。滑稽の記とるもあれ楚の優孟
が木雅の音をとりなし秦の優旃が咲をめしつれいかし
淳于髠が鵠をおろしたれと不信の辯にやつるまで禄
をそまいり東方朔が酒をめずるとも近命の花と
なりして首とこぞれあそそなり。張儀蘇秦ならびか
みしはいさか敵国をやつけて文武なつきとくいふ名
みちらしが学はる文章より客難賓戯の紕繆
ともらひ戦国を掛よ利害とさけん周秦の間ハさらに
て晋宋斉梁の中比より両唐の諸代の盛なるえ明

の今にいたるまで史書にのせし文武の人といへば
仁勇の智をかねそなへて風雅の情をば好む曹操
は詩にあそひて百列の歎をもちひけ英運は文をよくして
十八史の人はみなかゝる才ありて一たび其の類あると其の
人あるは智ひより世話に和あり不和あるすらも書る
事し俳諧をよし頓挫の機鋒ありて武家の餘力
ちる学ぶべき者也謙は儒仏の万巻にこえたの姓
とは好むとてあらたに庵といひ家といひあるは詩
には文句にかよひて人のむねとさとすべき文章の
感御あるは詩の心やうして俳諧の門をかまへて天下に

いふべきものなれば一人ありても成る事ならず世にも遊當
とおもはれぬ儒門にこの徒とあつかはぬ人ありて
も勇ある才も詩文の風流に心をとめず御上に
八藻の無為とおもひけれども智ある才の俳諧の
俳諧は外に機変の法あれば今人此道の徒とならべて
はて今昔の文章にあらず一つのとは世にいふ表裏の
を数ありて世に多能の人にかなひして才さへある才ある
人ひとへに詩をよむ才の人をしあらは洲綿を
武家の家法ありて調の鼓舞をして世にはやる俳諧
の行路難ありとならふへしかるに上よりしも人との

はなひらいてふかきを理屈の静かならはなしにおかふる世さなか
いふ理の動さるにさてもやらあり侍ると芭蕉翁下地
字なれとも一万代設下の風雅人ありてまさに秘密の
俳諧を得しふかきの本にありといふ故翁の一語をも
そらへて口にやすらかにいひちらし此にさためて論するをかし
へ師はやはりきふに浮み出れはあまた上にしあらて江西
湖南また此の洒落とまふさいかにもと秘伝の趣向は
およひてもまたむちからふ耳学の人はいふ理屈の
波はまさしくへらぬふかきと世とは別の一歩守里の大なるを
きらんや潮されおそろしくて此一語なるんめてもやる理

とは理屈とに善悪のことを立てらるて儒仏両つのへ子養も
老荘一家のこ一万言ましいやしく説さる所なると俳諧の
世情より要こ貫のこ門を闢くはしまて秘伝のこ言
なれにふきたるそと世情に用れいへしくよの文をやらけ
てりおほにあれへしも又倫の名をやうに此をそを俳諧てに
用ねいは附句と附句との死活とまうしてかなきまおを
俳諧なれはしも一字一點のまふ不能より兵るは此ちはく
新ならんいひそして一日の陰晴によるくいふ人の喜怒
とあつまる屯役や世情の附合にいはれの後にいはあらん
まふ文も武も論によりて志の此理の文都とい

て今日の世情にあはざる人と有情の際をいふ一ことなり
なりや御書の應機接物も先儒の和光同塵も論語に學
愛衆親仁も畢竟は世情の人和をいふも和は温厲
の二をあつかはるものなれども宗の一節にして言るに一興なの
眼力をはなちて俳諧し あれどもその性にひろく及ぶものを性
文をもてかくやうをよくして武ありやも武ありて
文あらんや文武は天下の治見られ共かへて我が
の字は前達は才一に俳諧のみと性とをあらはす才二に
俳諧の法と式とをさだむへしといへる荘老に蔵さる字を
たとへば性は詩歌に及ばぬ人すらをもちてこれを發露して

これを憤に錬し虚にして和を主として安閑者の生れ
それ爲なく、迦葉の瑟のおもしろも庐山の面に顯れ
て淵明が徳のこえしたりも例に三條の代ある人は家集
の間に世法をはなれて俳諧に誹木諫鼓の用をさとし
侍るは此一段を骨節として道を理屈のたよりによる
世情の温和に性を修しする事を我道の大宗御して
言に俳諧の四德をあはせ一し篇にや他の家にきこえて
人倫の和比親疎あれは利欲におちいれる歎あるから
公事の理論をこのむ人あらんにそこと款許の誠あるべく
物に勝負の工案をやめむべらく一篇の親切を

荘子は始て物理の二意より中うち滑稽の人とあげ
てる理に虚実の沙汰とあり孫を例の世話なりう
人和に強柔の力をおへて智仁勇のことを言に俳諧
さうして論語の和同孔子節うて世に一節あてけんや
公孫龍が此論を白馬の書遺訓と伝へて尊とる
時に千人阿と云へ師をまつて時にも人をあるてる
そと師徒に遊戯自在とも仙家の洞に地行仙とも
おそれを禁庭の隠者と云ふも史記に滑稽の隠一
とせし東方朔が俳諧の洞りして言に俳諧の師と
なさすと信ずるて一し云へてるや此論をあはせて洗斉

連歌に敵し俳諧は詩歌連歌にたちて発揮の
二字に虚実をそろえる事に俳諧の家風より
天下の人此舌頭と唯かわりしに虚実の二つ傍と
なり誹木鼓の用あんとえく彼に信の二字より
出て不徒の二字にさえし字に附てうけあれね相府
ある時は言ふ家よりわれ所はく一心敵のうちことと
わられ禅崩れも白くわ成るうし洋に俳諧の
酒落より樹下石上の隠者とあれて富もの人を謙す
へきや権威の家に恐る一字や其れた大気の二柱
あれども元れとなりおそれときる人それ行人には記さん

や・快をがくれるに侍く云わくもしてはなくすの周
ミ川よしまとする論語よ韻とちやや節をはへ文とけ
論の音節よして人よくはやり俳諧文へし並ぶ
迦葉よ例ぬの一對を例よ錯綜のはなく楽まる
はよ虚堂の頌をあつむる書は此理の術あれど子に

才の虚実ノ論

扨此俳諧の・虚実として例よ言語の談あるよりなる
と誹諧の両翼よしてなれば変化をまもらるれば也
ミれをも虚を実とやりけてあるて虚て補ひ

つられのるをよろかくしてあらん世よつふ儒者を実とすもして
佛経を虚誕なりといふべて・勧懲の先後をつまぬよ
もて詩端(コト)の虚実よ底ともとし実なるよまよ抽とうれば
虚なてあしが抽とならぬ世情の変とまもるべからはあらや
釈迦るを△馬麦(メミヤリ)のむくいよくるし・孔子を中九の和尚あれ
ゝあるをつるこれまを虚実の諸文ありをやぶ姫のは華
と要(カナメ)として△両権顕実とまそ經へいて書は論語を
鑑として・毋必毋固(ムヒツムコ)をたとし抗ふに彼方(カナタ)へ実をとりて
二方後の行をとひるき此方(コナタ)を二虚とよもて理用の関と定め
れをもこれるを儒佛の公言よして一代書經の真実

なりとや世上に連哥は實語として俳諧は虚頭なり
とてもへ人も例の変化をさしてかはらぬ物とおもふも
あやまりなりと侍べきや仏家のことはりにとらは和歌
と禅家と此ことは俳諧を連哥とも申
てはなるものやまゝあると或称よりも實を濡ともことし和哥
いふを實なとなをはいひし所は自己より實の光なを撰
も世なしにいれたる所にいましかへしいても貫にて
ありての諸は男女の中をやはらげおもき
ふくさしうしそうなるやこゝ實よほく理をもせ
大きも虚よりなく作るにてなるなれそれは人おもひ

和哥の鑑なる人にて古今万葉の本もなく又實をしとしてなへる
古人云この鬼には天地の御製もしは地続の御祥も
實ならんかれの花をかゝりて清浄の袂とめかしたるや
實に一個の気をむくへて山を晒をあらへてやら哥の寸虚
とせりとして六義に虚實の本あるこをとこしてかなし
五為を俳諧としてあのなかれ上下に述懐を説く
それありに例の俳諧の端的をいつして虚實不自在
の人に知してなしき芭蕉門下の一振あり
虚實をわすれてあれは虚實の虚實口語をかたす
と俳諧の文に此一大事をなへし一向なきてうを見新の

人も虚言と実言とかはりて此世の風なりけり
あれとはよせると虚とおほしめさむと実とおもへい
も虚を世にいふ。ふるて化におちて実ならめやし
そうろむ徒ありん此論りて虚より方物とそえて
実より倫とおそくふうむらんてまて荘周か喩も
みをいふや虚なられん婦姑のあらそひ中とそう
実に虚実の事を論とく実り好悪の二にかそうく
虚るとはやくの事あるへしそよへい倫のみとも
いつむに実を忠孝のせに似たれしたのあ為言の耳に
はなひみの有りのんよあいけるときのくしきまをおかせよ

人も北国にゆきて元の恩にたむき秋家にあらて父の
名をくろれ世らてそくこし実とるき地とのしおもふと
全くれるちらんのそうかねられて首あり根の折ら
いくらし実のよしあしても廿二に道あらん巧て虚と止
ろて虚実ありてはに魚つきるる遊人の敵意ありん
かせゆりちて俗人の謗言ありきりて文人とする秋の名
とてそら武ろてに略の法をしるいつれし机に同とそれ
てよ里の外の上面ありし文雅ありて同しん鬼神をて
よはとそうせ武器りて極そすの海をやうしむて虚
に喜怒の事ありしや況や聖経賢典にも此のそあるよ

此虚とおこるへいなれと言は詖とよくふやしけれは此論は
言語は虚実の自在をゆく利害の事をもれしあり
非ゆすく虚実の大小を論とを虚をおそれいて実を
ちいさしきもへい針のちいさふして其内の針のおかゆして
うゑるとこし我あふも針とおもそれさんや人あれ虚わ
とそらむへところや荘周も例の此形とおもちらかく此虚
実のかてちくちらん細もれもして虚ともそうして天地陰陽
ありも実をねりして君臣父子ありそと大小の論とな
いろんそと生ねの辨をやいらむやらそて実のりいらさもく
そ虚の説をかりんらん実を虚実の虚実もりして此の

天堂まれ遊やさへかの地獄ゟして入ゆるしとそろ佗らし
きるゝよ先はありそ極よ好惑ありしもろふと入るか
とゆきれいも虚の発ゟんらるやをそふきの慢ちゟん
うち此語も我家の讖文として實よ新安の朱
子も大学の序を有作とも言に儒佛の内外を
ゐる毎し此ねよ長そゐも虚の実とおもひも一
実よ於て虚よあそふ一ろくれもれ白馬の法の第一義
りて人のそしやゝるふとそゐる大学の綱領をふもゝるや
そ書それ孔子の豊遺誡として明性の明を虚実といひ
新民の新を變化とふるゝも皆とも虚実の二法

よりて変化とあるなりとなんいへり今さし虚実の大法
を論ずれば虚に居て実を行ふべし是非をわかれば義の外にいで
て耳とあはせてしかも実に居る人は歌誹をまじへて金石
のちぎりに富とはなきと彼に似りしてそれてまぎれなく
仁義に好悪の垂まあるとあるべし寔に虚に居るや
実に居るも例に両翼の用あれば虚実の大へねぶる
所をおもひしく思ふの三流とえて玉へしはなれいて
虚実の性をいへるがごとくもやかうしあらへせるへ人あ
て虚の字をとらむに彼らし虚に居るはもちろんにて
実とあり我めし実に居るは古し我からと虚とし去るべ

けふまで実のわざをなせば実をさぐりて虚の作りをきかくなれ
あり これらに自在と不自在とをあるべし むかし
△龐居士が遺言にも願くば世の所有を空しくて所無
をば実とせよといへるに似たり 畢竟は虚実の論
て虚実の虚実も此まで也 人は此語を左右に繊て
起居なさば意をうまるべし
傳曰 此一論は俳諧をもかぎらずむかしよりの学陣の力
とはかりして儒者は仏者をかろしめ仏者は
儒書をよんで陥れりとおもふ 今は儒仏法にも虚実
あれば仏法にも虚実ありてあらそふ人は字面

とすべく言語の表裏をよくわきまふるにあるべし
誹や虚実の間にあそびて迂詐の真言といふこの句の
真言の迂詐といふもありてこれを唯仏の所と
さや此脈の師よりつたへられは口伝をあかしやかなる
人もあらんなるにも虚の危ふからんよりも実の隠かくれん
とも祖翁の論者を動かして誠に笑話とせしふ
あれはかの牛刀の蔵といふ詞に表裏のぞうひあて例の
実地よりとはいへる人ありて実と誠実の口伝としたに
君守や此論の秋帰た虚実と再治して居の一字
とするさまと般若の六百巻も智の一字より数

しかもとらんこれらの所謂をもて道とするへし況や孔夫子
の遺書とひさく庵居士が遺言をおもふなる所に儒
とよくし仏とよくして虚実は此論と證しみる
画ぬし真似れは此論も馬麦牛刀の字對よりて
法等し論語の要文をあつめて文武よりて虚の
喜怒をとられさらん針舩の喩をはらすして鼓舞
金石も五息對の所あらんやりして大学の門願をし
明新の二字に注者をとらるとて俳諧の六家の字
とあつかるこれらを奪胎換骨のはかりして実に
我門の文章ありとすへし

第五姿情論

それ俳諧の風姿風情ともに一やうにして今の差別あれど世
古風は耳よりきゝて言語の上の姿をとらへたれど
今様は目にて姿をみて言語の外の情を含む也されば
古人は情のこゝろにて今は姿の論とする一概に情ある
姿なきもんや世上の事にて姿あれいと其概あるを
あらそひ給ふし語る風雅の姿と見へ候はん言語の姿の見
へくきにありてもとより風をも取つて見るべし是を要す
本男本女にて姿情の論まちまちなれば今はこの風言語の

の道理は俳諧話の一大事にてあるべきや世間に姿情の先後
を論ずる人は天地の姿よりしてそれを信じて左とも右とも
地とふかき正法の姿をば行ひてまつ天地は人の情を
うつしたるは人を姿の品にしてして月星を行して
天の姿をいひ草の体を行して地の姿をくさる古文の
秘訣も言葉ある八姿を見ずして情をば知ると
法に一々そのへ君臣父子とさしさま天地の道
まうりて姿を思ひて本とはあらずやまたる
を姿ありて手にいふしてあるはなかれくるは今は
姿の論にいふも論よ忘一文の心得なり甲雪と薬

いもはをならりハ衣食を供せねハ孝ならざる世の人
ありて仏たちありし論とハ其文のよしみ深きをしらし
めハ露て来く世尊の法をすてゝ一まきや深きのかんかる
を論じるハ及びて此故ハ師の捶りし五逆の咎を
地獄と名付て殿の門に銭羅刀を持る八十五の
罪を極楽と名付て座上の女に王宮歌楽をかなへる
清ると儒師のありきいはいぶ来の法をたてあん地獄
極楽の深きを迂詐あらんと迂詐とするへて迂詐わと
疑つるなれど祥読きて繋縛擬とぞりなるう
仏師は二万役あれハ儒書も上面あらんや蒙昧に文字

の深きにいふ也なしや中古の俳諧を双とし今世の
歳旦といふ月並して詞をむさぼりて
作者く敵と作するこれを始めて風雅をしらず
いふなりけりへきるなり人評や今の俳諧とてたゞ此の
師に姿をとへば情を全くあらんかくゆかし
き風情とその中に含する風雅の餅情をいひも
たる俳諧のこゝろあらんや世くの詩をも此深きを
い中古の名様子とやいひむ魯に連俳の深きを論じ
月むへとおもしむかし古今一情にて詩を吉しおもて連俳
とおのし深きに詩に連俳にてさるべくも仏付ても

●よき差あり傾くにけても一方なあり其ながくなる事を
連俳をおもふ一等なとゆけども等一願し本意くれ
深かゝりて俳言連語の論するに及ばん●せうしれ
連詩の情をうりて俳諧の深きといふもむしろて俳言と必
るを論ぜしや凡情らしよりきとたちかねて凡深
へさらに新しさを云や●新古は時の附合によりて抑
変化によるべきも云はれて其情の変化によるべき
●連歌を云ひて俳諧よりて深からあり其情を知しと
いふむ人と悔る端的の不まりん意に俳諧の附合と論
きはねに其句の深きを見て其句の情をゆづらば及ぶ

しかに吾為に耳をうりて俳諧とす一つる風自をよりて俳諧
をうるこーとくるる●耳同に深き情の出るひまるうして味は
ひの情の味にひあれは色情れと言語の深きとりふくらのさ
人にあるへそれしあらそらしをふ所に両袖をかへて首
とちくちあらば暑しとてふ附は行肌をやあて膝をかくる
元を下果の深きしみすらくあらとまてる物語の意也
去られは一字一點より附合の深きもかなりゆけくりかなは
俳諧とうふとも古いと云ふるあるへきや●けなに偏故知新
の字より今の俳諧の添へうるとまるへし史記の條林
すも言わらんと賛へしてて或は●敏捷の二要うしてその事ゐ

詞を失ひたりとも或は好みのまゝにしてんとありてさらにも
耳をおどろかすとも会て言語の形容より
文章の虚実をしるなれば、さや我等の俳諧師は
姿情は新古をえらむ、されば新古は言語の間にも
あるなりと知りて、一もとは言に儒仏神をあつかひ
こも語に詩哥連哥をたゞ入れは俳諧は言語の妙
とも新古の強ともまうべきや
傳は此篇は全く俳諧の論なり、天地にことさらの先は
より君たる文章の姿をしたくり儒仏に文章の姿を
あらそひたく筆意は連俳の姿情をしたくべし

況や言語の姿より耳目に的情の差なきとさる
人にあまつりは文に手やうに物に可嘩の信あり
てんと悔く傳ふことはなし此れや此道の詳
もつてまた温故知新の心をもて俳諧の宗
師の説とあそぶやからを見ば耳をかたむけ給へ
ことは眼をさむし蓋いはむ古文の秘訣を重益の
詞なりやいかにさきて紙語の儒仏神たるをもて詩
連哥に等しきる神たる詩哥の詞をおこして見れ
孫なはゆのはふくみ子をもて三様を等しきてむ
それも文章の一格とみるべし

第六俳諧地

それ俳諧の地とは何ぞ △孫めうちに来地といひ俳地
天とて下地といひやして今様の風俗を地として小物あり
節と云ふ物あり曲をこて中の要をれなし人なをも儒は
のたゝも勧善懲悪と地形として仁義礼智に
王城の儀式となるへ殺盗婬妄に地獄の形れを
作るけれよ仏の説法も世界の耳をおとなとし
△七寶の華厳を七ねりして何の曲もなくて節も
なきに阿含をす十二年の骨折ありそれに擬誘陪随

のやうに教の次第と戒を一にしてそれ論語とて小物の
法家の文章にてくれぐれも人とあつて小論法の
やうに助語をかしとぬくもあれにけりして有人の為と
実て虚実の節として小物をも七章まで過はれん
はらずかへ節のなからんも我宗の風言あらん括構人を
あざむきして例の笑ふ小も俳諧也節をまたくの骨
うたてしくて達之の大むつかしき知に一しく今や浮となひ
言といひつれさるを地と存知して其のあるなくに
あらんやしてや俳諧の地として立てなれ侭
それは雑俳の作りひとしきを例に虚実のあつかひ

より例ハ風雅の情ひしとあるといへるハ今の世の姉に婿
とかされて云ことへ俳諧の席なさをも情あらたしきの
ましらひにようき人あらんやあしき人あらんや世のうに
条件の風抛さへ骨ありて此うて秘まる所に
を節なるやしたかいにて節の面白きをもて好ける流
ありよかくむき色とめくまむや情ありてあるへき所に
説拝さハ自然ともてはよかをへるといふに俳諧の心下
ちるや言人連哥の家とあるへて一趾へさるを云けん
すや今まて遠国の俳諧をさけん乃ましの葉を
置いありそて世れる中の言をとこはく地とふかを

即よあてはきをそれてあるらくしをふく俳諧に
は古よりしらくおもを史記よりて和歌らるはう
專よ心緒の喩ある一しと角て古歌の言葉あるんも
それと癖をとふてあれ人の云ふふも癖也書に
人間の地と傳との間ををに飯らハ茶とのきて君父の
あのれをとそらをれは男女中の交とをそれへるやして
月雪花あとくおれの風雅の情とられてまもそのれと
こなるてふるをなは情んハれとて四時の佳節ありて節儀
正月ハ調とあるきと云年賀入嫁取の時ハ久別しおれ
深秘の攫あらを情ねはよりもてなさあらやるは人よ尊さる

詞はひかきてうし媚るものめくかゝんとすれは俳諧を
世情とあふれきし物の節〳〵にて儀式をもちて詩僧
正月の三物なとにおゐて撰集を略して天下
の人に笑はれんとのゝおほくは曲節をこのむゆへ
俳諧の地をしらねは地のある所に自在なれは一字
一言に全盛の形ありて好士の耳目を驚かす
はくらむやはかれを言は一おもむきも守ふへくも
十年の修骨あらんに彼ふ人〳〵の俳諧と論し一と
絹ともにしるへし天下の紺屋に雛とかけて雛形
とはかしありくに似せんは地と師をかふへきまじゝせんと

いひ儒門にも恒心をいふ。それも名のみにして
物に制せられ世の人にも衆諸門の俳諧師は俳諧に
何のかゝはりや足を容とならは又た子にもなき
者に素に対して又末をとめてかくる名も言のえ
ついひそうふん俳諧をはらひて今日の用の放埒あらん
とて神もしらぬ人もあらてはれは人間の地とふ
すまとさうふ見し
傳曰此一篇は人間の常にして其れの己が地を
物やはらけんとは奇人達奇に第して自門の
放埒をあけをかる俳諧に一箇の諸勝地ありて

と信ずべし譬に蒼嚴阿含の三藏よりいでたる書と
をあつめて四十二章經の次第といひなし論語は
四書の助辞をならべていづれもその虚字をいかにから
ふる例の儒佛にあらぬ例の文章にもやうやうあら
もやまぬると論語の隠便ありもはや一節の
ちからを添ふる譬を鉢門の一脈として愛と云易
に看過せし人も前に書豆とかきつけまりむ
海達ふにも二節をあつむ驢龍頷下のひかりを
はなこしてはなれぬ人間の地に優小へきとや書ば
君父と男女と此一要をいれ二文の二字をもて是等

朋友の交備と言ふるれと雙関なる交はりと云事也

第七 修行地

抑も仏法の修りとをあらはへ広るなりといふは
より儒佛の学者も修りたちへいりするにみえて
ことを行しがしことあれとくらかり行と趣かれく
あらて虚労の俍人ともありあるをみよにふる此
媚人となるかして仏法の虚閑ちる曠野よ弱を
これをあしてこれのきはめてたまのみなこれにまうるまで
迷ひおうかくれのなをいきんのは孫のかつるとかくなる佳陳

和漢の人皆まて伊呂波とならひ丘乙己とおほゆれは
庭訓をよみ三目きゝて先として文選の頃はわかれは
古文真宝を残の淡の沖に読めらるれより三体詩も
ひとつし茶の湯もお月しうしはてくいろいろしおんの
猿のまねもはやくなく人とてみえて一藝にもあらしは笑
ふへらて況や俳諧を我好みからに和哥所の式もはりおく
まて里村家の皆もすてはれは陰国ふとのえるあそ
て奇もまもゆきゆきまもゆきて書籍同様と頼らし露る
うき起らまも引ゑて六年五まの俳諧とさけは史記
の俳諧しふ抽まれあして世まらふ唐人の詹言あるをし

されども又儒仏の道よりも四を思ふるとても皆ゝ
同未悟ともすくうろそそれて先へゆけとるるあつかれ
そらくとあしへ唐人とのりいとあふしこなゝ人
は只ゞ五七の字まねとなりひて発句の妙まも附合も新
もはし分れてかくのこらくきさいひをかつくのこくし御の
御をえてひく。これをまさしけて俳諧の世話なると
まれは俳諧を作ねのあ他とみ七五七くの句は作り
て和もまふなれは人もたひきおふもとなりあるも知れ
は石日の功と金されとも六年五まの俳諧よりも今様の
変化をたなやうなかん寛に危俳の人俳を稼くゆき

例ハ僞りのねこをかぶりて親仁をこびる下心にて
息子をあしらひてまへ下さといへども孫ハ世にの憎なる
ありふうふハ是れも俳諧の虚実とさへいへハ例のたにほ
理不尽にまかせくさらいとゝもいとよからぬりしを
今しいさこよ利門の俳諧師をまねいて十年の功を
積ミ安ハ立場ハ俳諧の眼といふて媚ヘ人の病
ありとや俳諧を平生の調子ありておのれ人の人を
あしらハせゆるさぬ七情の我とやハらげて併ハ今日の世法
なりもしとし昨の松北風も涼しく十年の月をあし
扉れハおよび骨折りて人事するそのゝ故里の人を節れ

河山の風景も花ちるの風情も麦有田拄のちらり
来るを見るの晴ゝりて後の北四又のおもしろも秋を
夕日の行くへ人の声の老實のさいしふも今ちの
遊女を緞子にまとうて病おさへにまくへはける
田舎の治郎を蓮生よおもひさい痴ゆるゝも知あれ
ある武士の剣術も大工の書籍も世界ゆあらしと行う
うなゝ皆くそのまゝてまゝて何ゝも俳諧の理ら
いくへこい言と・酔心和説とも誹諧其事をあるまし
も得ハ人の清秘をも我家の俳諧を得へくてあるに
そゝをあとへ之て傍くせずて何當ももり外毒と理

ありけるのあふさに宗匠の追剥ありて発句を擬
切字の子細をたのみかうして才これら韻字の秘伝を
かやうへ古今のこころの伝授と定んとしとあって
はしやおまかれをおろかなる人を信んとおうして皐を
金銀をも剥とられたる俳言語入られあけりしは洒也
されば俳諧地の泥をといふすゑ十年従く附はたるを
えんたくし十年還る附にも理を知らくて候とて
またこの馬車とていやまる剥をやつる附は六年の
功を經たる俳諧の上をといふ事へこそ宜に俳諧の
・知ると不知とを論ずれば十年の下にいては論ずるも及ぬ事にて六年

の上をと下ばの下をともするおわし 棒に障えひらく
馬となく大名とおのひ車とさへる家とおもへ 俳諧
これ白の撲物よりて或る市郷のうらひよかいへり或る
付折の附を与ちうひく程くし・附合の変化あらんに
上をたまつからつで理をとらへきて下はあらそてく
これはにやまふ従る年の姑うる揃くなるの物程
よあまうらあつねとそうて十年の姑よ叔てこそた
の物程よくうふうぬと明晴の沙ういちて進まちるるとも
いはまつる不知れあいちし 宜に上をの下をに知して下を
の上をは知さるゆへときてうへしこれ

君子なるも頑なる不肖なるありかくなるは俳諧の俳諧
従ふも逆ふもおなし又鈍なるに居りて我里の
俳諧よあるへからぬ一字を媚る人のまゝ今ま貌の頭よ
挨体をさしてはやく我門に入会すへし
俳諧は一段なるその指子よかゝりて例よ俳諧の字格
より以の漢の知よに帆とありなまの体の上言以業
よ花とはたとちるなる今様の竹拂も如それと
実よ雅俗の大了ありて十段の中は変化となるし
全篇を世間おし了見て眼あの俳諧を叔見よし
て七尋八貫の法まといはしかゝる古人も意を

帰去来とも帰家隠坐ともいかさる今此論者
の一字録なるはらく蕉翁の俳諧は字か作らぬ
雑口ともよらさて全く俗談平話の中より詩哥の
風流と人にきらしめ世法の二ろをとせよおして何者
と云ふ今の暁とちかより時宜の一折とかくけむ
そるなれるに此論の親切と記さん為書おきけ
一篇を十論の中の要にして文章の法を定むとしへ
うちうるもあら我の駒の形容より芝生かゝれの古哥
といふて人の二字にいひよせるこれと鎖詞の文
格ましてされより我里の俳諧は ねるて然かし

春秋とあり　明朗文章をはなはたあひ
あそびに哀楽を忘れさるものにて其典據ある
とありて言に隠見の文法とはたらし言に照應の
文格と説くし況や字句の對類を説くまでもなく
俳諧の文體といふはんやあるゆる此章の上よ
かたよりに百日の器用者を形容して古今に
或説を称くやもさらして上より下より他く
下より上よりに似ゆるとて白馬に一條の訓ある
とや誠に俳諧の文章といふも同じ荘周が文法
とも見るべきとて解牛の姿を写しに韓愈

ら理論とひかへ尚あくそ獲麟の格とはして
意も儒仰の中庸にあたてむとをしれば俳諧
ハ例のおとしく例の私しく例に世枕の一節を
たれとうれはるれて文章のうち不句として
長短に叶へるんや字のして草に葉を對をとも
伸びて飯ふとりて直はんとあるむに一字のをは
もちろんさまでもわらさて四六の文にあるより
書人連辞仰の文章からそてやうりれをほれて俳諧
の飄詞られ頴に木庵の売りしあるいとも要領にて
説とかやとてもまれると不根の持論を照し

はたは言語の姿をはなれずげんの感情をいやすは
はちて儒佛の歎呵する所をれともわざと不肖も
不実ともいへこてと談笑の諷諫ろして適當を
例の虚実はゞまる所なし依りて此篇の文章を
頌をとへ天下の俳諧師を学ぶよりて婦子をそへる
よりも尚あまねくに独人と云瑜人といひ上よとがま
とにこの口ばをとりつけて四民の姿を惑はすとはらくもきこへん
世は俳諧の文章をとやまるひかせくは此一笑篇は
遠ねそへ